

滅沒日

〔徒然草上〕赤舌日といふ事、陰陽道にはさたなき事なり。昔の人、是をいいます。此頃何ものいひ出でて、いみはじめけるにか、此日ある事、末とをらずといひて、其日いひたりし事、玄たりし事かなはず。えたりし物はうしなひ、企たりし事ならずといふ、おろかなり、吉日をえらびて、なしたるわざの、末とをらぬをかぞへて見んも、又ひとしかるべきし、其ゆへは、無常變易のさかひありと見るものも存せず、始ある事も終なし、志はとげず、望はたず、人の心不定なり、物皆幻化也、何事か玄ばらくも住する、此理を玄らざるなり。吉日に惡をなすに必凶なり、惡日に善をおこなふにかならず吉也」と云り、吉凶は人によりて日によらず。

〔曆林問答集下〕釋滅沒第三十

或問、滅沒者何也、答云、曆例云、滅沒者、是曆數餘分、陰陽不足、非正日故、堯不以此日下堂舞不以此日通四方也。又沒者天與日會而日不及於天餘分也、是曰氣盈、又曰沒、又滅者、日與月會而月不及於日餘分也、是名朔虛、又曰滅也、皆以非正日故、聖人慎而不用也、百事勿用之大凶焉。

〔董蠶内傳〕沒日、此日曆註日月相違時候隱沒故云爾、七十日及七十一日廻歸也。

滅日、此日曆註日月相違時候隱沒故云爾、六十三日四日廻歸。

〔頭書長曆上〕沒日ハ、天ト與日會シテ、日ガ子天及バザルノ餘分、年中ニハ五日廿四刻有奇也、是ヲ氣盈ト名付テ、正日ニアラズ、一切ノ事業ニ惡日也。

〔寛永大雜書〕ほろぶ日の事

正、二月、たつとり、い、三四月、ひつじ、五月、いぬ、六、七、八、九月、とら、十月、うし、むま、十一月、み、十二月、うし

〔頭書長曆上〕滅日ハ、日ト與月會シテ、月ガ子日及バザルノ餘分、年中ニハ五日六十二刻有奇也、是レヲ朔虛ト名付テ、陰陽不和ノ惡日也、故ニ上古ノ聖人モ、沒滅ヲバ慎給フ也、サテ一箇年中ノ沒滅合セテ十日八十七刻有奇也、但シ三年ニ及シ、二十九日五十三刻餘ヲ積ム時ハ、即チ閏月ヲ